特集・神話を考える-

わたしと日本神話

荻 原 規

子

- ファンタジーと神話

――「空色勾玉」「白鳥異伝」が生まれるまで――

素直に語ってみたいと思います。どうぞお付き合い下さい。 ぜ日本神話を使って創作がしたいと思ったのかを――素朴に、 うなものはとても持たないので、自分の創作から語れることを して参加させていただきました。学会で発表するようなたいそ ――創作とはたいへん個人的なものですから、わたし個人がな 古代文学会にお招きいただきまして、シンポジウムにこう 今ご紹介にあずかりました荻原です。よろしくお願いします。

○私と古事記の出会い

私の生まれは東京でして、育ったのは町田市(東京都西南部)

あっても江戸から繋がってきた方々の中には、地元のお祭りと 随分いろいろあると思います。その中で私という人間は、親と ら、古事記との向き合い方には、時代によっても人によっても 前戦後の捉え方にはいろいろな人の感情がまつわるものだか か神社とかお寺とか、いろいろな日本の伝統をちゃんと受け継 か地元とかそういうものからもらったものがない――東京で 古事記には歴史的な解釈のしかたがいろいろありますし、戦

> 寺に先祖の墓があるという、地縁のものが何一つなかったため 神道から遠ざかりたかったのかという気もするんですけれど、 はきっと神社もあったし、お祭りもあったと思うんですけれど ところが、寧ろ特徴的だったんじゃないかと思うんです。 く丘陵を切り開いた新興地なので、どこかの氏子であるとかお とにかく、家族で初詣に行ったことは一切なかったです。新し 終戦を十代後半で迎えた両親は、今から思えば、ことさら国家 も、うちの両親はそういうものに全然入っていかない人でした。 り開いたばっかりの新興住宅地だったんですね。地付きの人に ました。小さい家をやっと持てたのが、当時まだ多摩丘陵を切 し、どちらの親戚一同からも遠い東京で核家族として家を建て に、それがまかりとおったところもあります。 いでる方もいると思うのに――伝統が何もないところで育った 両親は東京生まれではなく、地方から出てきて東京で結婚を

れて、育ってきたなぁという思いがあります。感じなかったけれど、つくづく土地に根付かないところで生ま

そういう余裕を持てましたという本でした。本としてしか出会わなかったのです。何の前知識もなく、ただ、本としてしか出会わなかったのです。何の前知識もなく、ただ、本としてしか出会わなかったのです。何の前知識もなく、ただ、本としてしか出会わなかったのです。何の前知識もなく、ただ、本としてしか出会わなかったのです。何の前知識もなく、ただ、本としてしか出会わなかったのです。何の前知識もなく、ただ、本としてしか出会がを持てましたという本でした。

風土記も同じ本に入っていました。に、古事記を子ども用に書き直した一篇が入っていたんです。まれている中の、三巻ぶんくらいに日本編がありました。そこカの作品が突出して充実していて、その他の地方がいくらか含立工十巻が国別に巻立てしてあります。ヨーロッパ・アメリ

想のものだな」と思ったんですよ。小学生にもわかるんです。低学年であっても、「ああ、ギリシャ神話、北欧神話と同じ発んですけれど、それでも、比較神話学には全然触れない小学校のです。古事記はそこには入ってなくて、離れたところにあった欧神話」とか「聖書物語」とか、そういうものが入っていたんなども、古典編と銘打った巻には、「ギリシャ神話」とか「北れども、古典編と銘打った巻には、「ギリシャ神話」とか「北れども、古典編と銘打った巻には、「ギリシャ神話」とか「北

まったく同じいきさつですよね。ペルセウスが怪物に食われそまったく同じいきさつですよね。ペルセウスが怪物に食われそまったく同じいきさつですよね。ペルセウスが怪物に食われそまったく同じようなのだという。 創作と違うところは「誰もが知っているモチーフが出んです。創作と違うところは「誰もが知っているモチーフが出んです。創作と違うところは「誰もが知っているモチーフが出んです。 ところなのだという。

んでいましたが、やっぱり外国作品が面白かった。日本の話はにすすめられるでもなく、図書館などで児童文学をずいぶん読と思ったわけではないんです。読書好きな子だったので、だれもっとも、だからといって、最初から「日本の古事記はすごい」

どちらかというと読まなかったですね。

作者の育った地元に小人が住んでいたという設定のファンタ後世に残る名作になっていると思います。神奈川県横須賀の、ジーとして一番早かった作品のひとつで(昭和三十四年刊行)、れも知らない小さな国』です。これは戦後に書かれたファンタ象的だったのは、ここに資料に載せました、佐藤さとる著『だ日本児童文学はあまり読まなかったんですけれども、一番印

に失敗する――これは、イザナギ・イザナミの黄泉の国下りと下っていくけれども、「見るな」の禁をやぶって連れ帰ること

ギリシャ神話のオルフェウスが、死んだ妻を追って冥界に

ういうものを、後から思えば、初めて感じたのでした。もちろ というテキストにリンクして、急にリアルに感じられる――そ

ん小学生であっても、ファンタジーがすべて幻想話だというこ

イヌ語で「ふきの葉の下の人」という意味で、アイヌ伝説に出 ジーなんです。この小人の「コロボックル」という名称は、ア てくる小人族の名前です。

して、急にコロボックルの実在感を感じたんですね。 オクニヌシとコンビを組んで国造りをした小さな神様です。そ ナヒコナか」とわかるくらいには古事記を覚えていました。オ れを読んだのは小学四年生でしたけれども、「ああ、あのスク のですが、佐藤さとるさんは小人族の老人に、「スクナヒコナ んでいる小人族の由来を調べた結果、アイヌ伝説に行き着いた アイヌの言い伝えだけではぴんとこなかったものが、古事記 『だれも知らない小さな国』主人公の「ぼく」が、日本に住 カミサマガーセンゾダヨ」って言わせるんですね。私がこ

るからこそ、横須賀に生きている小人の根拠に日本神話がもち と、いかにもありそうであったらいいなと思える幻想の違いは とは知っています。それでも、うそくさくて入り込めない幻想 いられたことを、愉快に感じたのだと思います。 わかるものです。小人の童話はふつうは西洋由来だと知ってい 私は、ベースとしてなにかと外国ものを読んで育ってきたん

> 期に読んだファンタジー作品は『ナルニア国物語』であって、 たちはさらに自身の古層を掘ろうとしていた。 ので、そういうものかと思っていたところが、ヨーロッパの人 これはかなりキリスト教の含みを持ったファンタジーだったも 話を素材に書いたファンタジーがありました。私にとって、初

たんです。 考え及ばずにいられなくなる。そういうはこびで、ケルトから なら私だったら、日本神話で書いてもいいんじゃないかと思っ くなる――自分たちが住んでいる土地に最初にあったケルトに ファンタジーを追求すると、もっと古層に目をむけざるをえな 層が厚くても、やっぱり中東から伝播してきたものなんですね。 ファンタジーを立ち上げようとしているのを見たときに、それ 結局キリスト教文化っていうものは、西洋にとってどれほど

宗教やイデオロギーに何の関係もない、純粋に昔話のパターン まえたのだという気がします。読みものとして古事記が好きで、 た古事記や神道信仰とかけ離れていたからこそ、無邪気にふる 間がかかったんですけれども。 そういう発想で古事記に近づいたのも、自分が伝統に根付い 最初はチラッとそう思っただけで、実を結ぶまでには随分時

○『空色勾玉』が生まれるまで

をそなえている古事記がすごく好きだったんですね。

思ったのは、高校三年くらいのことです。 それで、「大学へ行ったらそういうこと考えてみよう」と思 もし自分が創作をするなら、日本の神話を使ってみたいなと

ものがかなり好きでした。私が高校生くらいになって、どんど には、ずっと外国のファンタジーを読んでいまして、イギリス

ん邦訳された児童文学の中には、イギリスの作家達がケルト神

いながら大学に入ったけれども、まだ自分で何かを書けるとは

一回私のスサノヲの物語を作ろうと思っても、つまらないんでうみたいなものがあって、それを例えば私がかみ砕いて、もうかさに合わないんですね、強すぎるんです。全部引きずられちゃいながら覚えているくらい印象に根付くのは、大勢が語り継いした。古事記というものがそれだけ強く、小学生の時に読んでした。古事記というものがそれだけ強く、小学生の時に読んでした。古事記というものがそれだけ強く、小学生の時に読んでした。古事記ということがよく分かりま書いてみて、これがすごく難しいということがよく分かりま

ます。スサノヲの行為も、アマテラスの所へ行って乱暴をしてている神々のやっていることに矛盾があったり極端すぎたりし古事記上巻など、こういう古いものを読んでいると、語られ

すよ。

いました。

私たちがパターンを知っていて、安易に語るとすぐに出てくる方向にお話が流れていくのが昔話だけれども、それ以上に、古代の人がこういう風に語ったものをここまで我々が保存した方。それを感じたのは、わざわざ自分で日本神話に手を入れよう。それを感じたのは、わざわざ自分で日本神話に手を入れよう。それを感じたのは、わざわざ自分で日本神話に手を入れよう。それを感じたのは、わざわざ自分で日本神話に手を入れよう。それを感じたのは、わざわざ自分で日本神話に手を入れよう。それを感じたのは、わざわざ自分で日本神話に手を入れよう。それを感じたのは、わざわざ自分で日本神話に手を入れよう。それを感じたのは、わざわがあるといないでは、私にはいいのです。

かくお話を作るのは好きだとわかったので、べつの創作を続け難しいと分かって、そこからしばらく手を離しながら、とに

になれなくてもいいから、ずっとそういうことをして遊んでいいたのは大学の在学中でした。ただ書くのが面白いから、作家ンタジーの典型に近い、お姫様や王子様の出てくる話です。書版された『西の善き魔女』という作品の原型でした。西洋ファていました。最初に私が楽しんで書いたお話は、ノベルスで出

れるのはよく分かっていたので、「古事記を使うのはなし」とれるのはよく分かっていたので、「古事記を使うのはなし」とれるのはよく分かっていたので、「古事記を使うのはなし」とれるのはよく分かっていたのを書こうとしたことがなかったんでで、まともに発表するものを書こうとしたことがなかったんでで、まともに発表するものを書こうとしたことがなかったんでで、まともに発表するものを書こうとしたことがなかったんでで、まともに発表するものを書こうとしたことがなかったんでで、まともに発表するものを書こうとしたことになり、「何本の書いてみないか」と私に声を出版できるなら日本神話を生かしたものが書きたい、初めて自作を出版できるなら日本神話を生かしたものが書きたい、初めて自作を出版できるなら日本神話を使ってみが書きたい、初めて自作を出版できるなら日本神話を使っていたころ、その後、普通に就職しまして、普通に趣味で書いていたころ、たいなと感じていました。

にたどり着かせて、たくさんの潮のあわいから根の国へ吹き送神々が風で吹き送り、川の瀬をどんどん流していって、大海原に流す儀式のはこびが情景的に語られるのですが、祓った罪を話を見つけました。「六月晦大祓」の中で、祓い清めた罪を川話を見つけました。「六月晦大祓」の中で、祓い清めた罪を川まを見つけました。「六月晦大祓」の中で、祓い清めた罪を川たところ、『延喜式』の祝詞に古事記とは全然違う雰囲気の神たどり着かせて、たくさんの潮のあわいから根の国へ吹き送

す。 祓った罪を自分が携えてさすらって消滅させる——とあるんで ると、根の底の国にいる「速佐須良比咩」という最後の女神が、

ミ、スサノヲの関係に近いものになっていったようです。 おけれども、ここでは根の国へ行った黄泉津大神、イザナミでるけれども、ここでは根の国へ行った黄泉津大神、イザナミでないから、もう古事記とかスサノヲとかは全ぶ私の頭から追い払っから、もう古事記とかスサノヲとかは全ぶ私の頭から追い払ったしまおうと思いながら書いたのが『空色勾玉』という作品で、だしまおうと思いながら書いたのが『空色勾玉』という作品で、だれなのに、意外と三貴子といいますか、アマテラス、ツクヨそれなのに、意外と三貴子といいますか、アマテラス、ツクヨそれなのに、意外と三貴子といいますか、アマテラス、ツクヨネスから、もいいますが、カースを表示している。

強く思っていました。

がいる」という、その設定を思いついただけだったんです。そ羽矢」という主人公二人ができて、「稚羽矢には双子の兄と姉『空色勾玉』を書き出したときには、最初に「狭也」と「稚

それは、私自身は古事記を離れようと決心したのに、そう思っ

神話にみずから近づいていってしまったみたいなところがあっ ども、最初から最後までイザナギイザナミの神話やスサノヲの を投影しようという気持ちはどこにもありませんでした。けれ れなら双子の名前は日と月にしようと、アマテラスとツクヨミ 台設定が日本だというだけで吸い寄せられていくものがありま て、お話が――私が仕向けるのではなくお話がみずから――舞 に近くなっていったことは確かだけれども、だからって三貴子

と思いました。 して、どこからも強制されないのにそうだったことが大発見だ した。「ああ、私は日本人だったのか」とびっくりする思いが した。初めて私は「そうかこれが日本の神話なのか」と思いま

三百枚くらいになってしまっていて、これ以上書いても出版し どうなるかは何にも考えていませんでした。すでに原稿用紙 てもらえないだろうと思ったので。 リーの真ん中になります。そこまで書いたとき、最後の結末が 『空色勾玉』は、稚羽矢が輝の宮を出て行った辺りがストー

もいいなら後半考えよう」と考え始めました。最終シーンになっ 後まで書きなよ」って言ってくれて。それから慌てて「書いて もらったんです。そうしたら「おもしろいから、とりあえず最 て輝の神と闇の神が舞台に登場して、お互いの決着を付けると いう運びはほとんど予定していなかったんです。

それでも、声を掛けてくれた友人にそこまでの原稿を読んで

付いていて、自分から出てきちゃうんですよ。書いているほう

素材――そういう意味では、私も古事記を読んだらまずヤマト

まず心打たれる。

でも、つまり、私の中のどこかにイザナキイザナミ神話が根

ときにふっと上がって来る――こういうものに出会えて初め 本人は思っているけれども、人間の存在そのものがそうじゃな 話を作ることはやみつきになる、と。オリジナルでありたいと て、「書いてよかった」という気がするものだ感じました。 んですね。それが、自分でお話を作ろう作ろうと努力している してしか接しなかった私でも、これだけ水脈になる何かがある たいなところで、共通の神話にふれているんです。読みものと 無意識というか、自分では意識にのぼらせられない深層心理み ジー創作では特に起こりやすいような気がします。たぶん私の 頭で考えていないものが出てくる、こういうことは、ファンタ 言うと、これが創作の醍醐味なのかと感じました。私が自分の イザナミが勝手に出てきたがったみたいな感じがします。実を 国へ行くことも、あらかじめ予定してはいなかったんですが、 は「やはり、こうなるか」という感じ。狭也と稚羽矢が黄泉の

○『白鳥異伝』で意図したもの

ヒーローが、これほど古い時代のここにあったということに、 好きになりますよね。あれほど日本人による、日本人のための てしまったんですけれども。 古事記が読める人は、たぶん、誰だってヤマトタケル伝説が 物語を書くという行為は奥が深いと思いながら、ここまで来

いんだと納得できるのはとても面白いことです。 誰もが自分のヒーローにしたいと思うような魅力を持った

作何かをつくるとしたら、ヤマトタケルをやってみたいなとは作何かをつくるとしたら、ヤマトタケルをいったのときに、これは前いたのですよ、ヤマトタケルという人物の造型が。これもやっぱりんですよ、ヤマトタケルという人物の造型が。これもやっぱりんですよ、ヤマトタケルという人物の造型が。これもやっぱりたらい理屈をつけて綺麗事にするとつまらないんですね。とうしい理屈をつけて綺麗事にするとつまらないんですね。とうしい理屈をつけて綺麗事にするとつまらないんですね。どうしたらいいんだろうと思っていたそのときに、これは前から知っていたんですけれども、常陸国風土記にヤマトタケルから知っていたんですけれども、常陸国風土記にヤマトタケルが出てくることに思い至りました。

タケルが好きになったので、『空色勾玉』の発表以後、もう一

と思いました。

本は、児童文学で卒論を書きたくて大学に入ったので、それは、児童文学で卒論を書きたくて大学に入ったので、それを一年間やったんですね。その時に、常陸国風土記内でヤマトを一年間やったんですね。その時に、常陸国風土記内でヤマトを一年間やったんですね。その時に、常陸国風土記内でヤマトを一年間やったんですね。その時に、常陸国風土記内でヤマトを一年間やったんですね。その時に、常陸国人に、そのこの点は初志賞徹して児童文学で書いたんですけれども、そのこの点は初志賞徹して児童文学で書いたんですけれども、そのこの点は初志賞徹して児童文学で書いたんですけれども、そのこの点は初志賞徹して児童文学で本論を書きたくて大学に入ったので、それは、児童文学で本論を書きたくて大学に入ったので、それは、児童文学で本論を書きたくて大学に入ったので、それは、児童文学で本論を書きたくて大学に入ったので、それは、児童文学で本語を表して大学に入ったので、それは、児童文学で本語を表しているのでは、

す。古事記・日本書紀では、けっして皇位を継いではいないは「ヤマトタケルのスメラミコト」と天皇名で出てきてしまいま

常陸国行方郡の地名の由来として出てくるんですけれども、

ちました。 伝説も、もっと自由な作り方があっていいものなんだと思い立 か。そういう、びっくりするような話になっているんです。 水のこっち側にたどり着いちゃったということじゃないです ケルを先に行かせたことは、特に有名な悲劇のエピソードだと タチバナヒメは入水し、生け贄となって海神を鎮めてヤマトタ 載っているんです。ここへわたる走水の海が荒れたので、オト した、だから安布賀といいます、という地名由来がどうどうと れるんですけれども――が、倭から追ってきてここで出会いま オホタチバナヒメ――オトタチバナヒメとはちょっと名前がず ずなんですけれど、完全にそう言い切っています。東征するヤ いうか、思い切った改変というか、悲劇で有名なヤマトタケル いう、その思いがけなさに感じ入りました。結構おもしろいと いうのに、常陸へ追ってきたということは結局、死なないで走 マトタケルが仮宮を作ってそこに滞在していたときに、お后の この時に、ハッピーエンドのヤマトタケル伝説があり得ると

タケルを書きたいと思ったことが、『白鳥異伝』の根幹になっタケルを書きたいと思ったことが、『白鳥異伝』の根幹になったのものに出来るかと思ったときに、これを思い出して、そん分のものに出来るかと思ったときに、これを思い出して、そん分のものに出来るかと思ったときに、これを思い出して、そん分のものに出来るかと思ったときに、これを思い出して、そんかのものに出来るかと思ったときに、これを思い出して、そんかのものに出来るかと思ったとが、創作としてヤマトタケルを自みたりしただけだったんですが、創作としてヤマトタケルを自みたりしただけだったんですが、創作としてヤマトタケルを自みたりしただけだったんですが、『白鳥異伝』の根幹になった。

コハ。
 コハ。
 コハ。
 コハ。
 コハ。
 コハ。
 コーのいろいろなところで、意図しなかったのに古事にてしまうのか、本当に分からないんですけれど理由もなく面とでしまうのか、本当に分からないんですよ。私は「鳥のお葬記から好きなものがふっと出てくるんですよ。私は「鳥のお葬記から好きなものがふっと出てくるんですよ。私は「鳥のお葬記から好きなものがふっと出てくるんですよ。私は「鳥のお葬記から好きなものがふっと出てくるんですよ。私は「鳥のお葬記から好きなものがふっと出てくるんですよ。私は「鳥のお葬記から好きなものがふっと出てくるんですよ。私は「鳥のお葬記から好きなものがふっと出てくるんですよ。私は「鳥のお葬記から好きなものがふっと出てくるんですよ。私は「鳥のお葬記から好きなものがふっと出てくるんですよ。私は「鳥のお葬記から好きなものがふっと出てくるんですよ。

まり、神話が生きているということなのだと強く感じました。の中に古事記を吸い上げればそれでいいのであって、それがつえていいんだなと思いました。私たちが、今の私たちの楽しさないでしょうか。楽しもうと思ったわけではないのに、みずからないでしょうか。楽しもうと思うと出てくるんですよ、一生懸ないでしまったりしています。あれも、意図したというよりはらせてしまったりしています。あれも、意図したというよりはらせてしまったりしています。あれも、意図したというよりはらせてしまったりに対しているということなのだと強く感じました。

どうも、ありがとうございました。方ということでお話しさせていただきました。学問的な話にならないんですけれども、私と神話のつきあい